

---

# ポケットモンスター ～お嬢様とレックウザ～

まどろみ猫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケットモンスター ～お嬢様とレックウザ～

### 【Nコード】

N4861Z

### 【作者名】

まどろみ猫

### 【あらすじ】

無気力・無表情なお嬢様の、十六歳の誕生日。仕事で滅多に屋敷に帰ってこない父から送られてきた誕生日プレゼントは、伝説のポケモン・レックウザだった！？ポケモンを持ったことなどないお嬢様、自分には資格がないと逃がそうとするが、人語を理解するどころか話すこともできるレックウザに気に入られてしまい…！？

自分の生きることの意味を見いだせなかったお嬢様が、人と触れ合い命の大切さを学んでいく。ポケモンと人は、どのような関係であることが理想なのか？生きる意味は見つかるのか？

ジヨウト地方での、知られざる少女の成長の物語。

## 誕生日（前書き）

ポケモンで、書きたいと願っておりましたまどろみ猫です。夢が叶って嬉しいです。

私は少しでも上達したいので、よろしかったら感想やアドバイスをお願いします。厳しいコメントも、自らの糧としていきたいと思っています。が、登場人物に対する批判はおやめください。

至らぬ点は多々あると思いますが、よろしかったらご覧ください！

## 誕生日

私の名前はカノン。自分で言うのも何だが、お嬢様だ。…外見は、そうは見えないだろうけど。

私の住んでいるジョウト地方は、なかなか住みやすい地方らしいらしいというのは、私はこの地方はおるか、自宅である屋敷からも滅多に出ないからだ。

出ることなどないし、したいこともない。だから、毎日の学習を終えると無意味に時間を潰す。昼寝をしたり本を読んだりピアノを弾いたりテレビを観たり…だらだらと、時間が過ぎていく。

両親もいない、友達もいない、ポケモンも持っていない私の話し相手は、屋敷で働くメイドさん達くらい。まあ、話すこともないけど。

「お嬢様。旦那様から、小包が届きました」

春の、日差しの心地よい午後。ソファに寝そべって惰眠を貪っていた私は、主であるパパに代わって屋敷を管理している万能執事・ラストの声に目を覚ました。

「…ラスト。仮にも十五歳のレディの部屋に、ノックもなしで入ってくるなんて無礼じゃなくて？」

眠い目を擦りながら、一応抗議する。

「ノックをしても、お返事がなかったもので。…それに、お嬢様はまだまだ子供ですよ」

ふふふつと含みのある笑い方。明らかに、私の発育を笑っている。…まな板じゃ、子供扱いされてもしょうがないか。特に怒りもせず、手を差し出す。

「そうね。私は子供ね。…パパから便りがあるなんて、珍しいわ」  
頂戴と、差し出した手。恭しく渡されたのは、綺麗にラッピングされた小さな箱。

「何かしら？…あら、カードがついてる」

広げて、声に出して読む。ラストも、内容が気になるだろうから。「何々…カノン、誕生日おめでとう！十六歳になったカノンに、パパからプレゼントだ！きつと驚くぞ！カノンの誕生日を祝えないのが残念だが、パパはいつでもカノンのことを想ってるぞ！帰る日ができたら、連絡するからな！」…ああ、今日は私の誕生日だったの？」

読み上げてから、ソファの横で控えるラストに訊く。

「…お嬢様、ご自分の誕生日をお忘れにならないでください」

心底呆れた顔のラスト。若いが無能なこの執事、顔までいいのだから、よほど神様に愛されている。

ただラストにとって不運だったのは、敬愛する主人に仕えることができず、私のような娘の面倒を見なくてはいけなかったことだ。

「私の生まれた日に、何か意味があるの？」

生まれてきた日に、生まれたことに、何の意味があるというの？

「…お嬢様、旦那様が悲しまれますよ」

私の言葉の意味を察してか、ラストは眉をひそめた。でも、それもどうでもいい。

そう、すべてがどうでもいい。私は何の為に生きているのか、わからずただ生きているだけなのだ。

無意味に、無気力に。ただ、生きるだけ。

「…旦那様からのプレゼント、ご覧にならないのですか？」

ごろん、とまたソファに寝転がった私。そのまま微睡むつもりだったのだが、ラストの声に妨害された。

「どうやら、『私が驚く』プレゼントに、興味があるらしい。」

「ラスト、見たい？」

箱を渡そうとすると、首を振られた。私へのプレゼントなのだから、私が開けなくてはいけないのだそうだ。

「…わかった。開けるわね」

普段無表情の私が、驚くものとはなんだろうか？

「これは…モンスターボール？」

小さな箱に入っていたのは、見慣れた物体だった。ただし、変わった色の。

「紫色のボール…パパがいる地方では、これが普通なのかしら？」

そつと持ち上げてみる。意外にも重い。

「ねえラスト。Wの文字があるわ…ってどうしたの？」

隣にいたラストは、食い入るようにそのボールを見つめていた。思ったたら、その目が輝きだす。

「これはっ！マスターボールですよお嬢様！」

「マスターボール…ポケモンを必ず捕獲できるという、幻のボール？」

トレーナーではない私だが、知識はある。この万能執事に叩きこまれた知識が。

「さすが旦那様！お嬢様の為にこんな希少なボールを入手されるとは！」

ラストが興奮し始めた。冷静沈着な彼は、パパが絡むと豹変する。

「でも、このボール未使用なのかしら？」

振っても、音はしない。それはそうか。

「それに、私ポケモンをゲットしたりはしないし…ラスト、あげる」  
渡すと、ポッポがタネマシンガンを食らったような顔をするラスト。と思ったら、狼狽して突っ返してきた。

「だ、だめですよお嬢様！これは、旦那様からのプレゼントなのですから！」

優秀なトレーナーでもある彼なら、有効に使ってくれると思ったのだが…。

「そ、そうですよ！マスターボールがプレゼントだとは思いますが、一応中身を調べなくては！」

…素直に、受け取ればいいのに。私は、要らないのだから。

屋敷には、ポケモン転送装置がある。一般家庭にはまずないが、

パパがお仕事で使っているのだ。

使ったことがないので、ラスタに操作してもらおう。慣れた指捌きでキーボードを打つと、装置に紫色のボールをセットした。

「中にポケモンが入っていたら、画面に名前と姿が表示されます。

…楽しみですね」

につこり微笑みかけてくるラスタ。子供みたいだ。

「…では、お願い」

「はい！」

たたたたと、彼の長い指が素早く動いた。そして、画面に表示されたのは…

「…レックウザ。伝説の、ドラゴンポケモン？」

「…お嬢様！もつと驚いてくださいよおおおおおっ！」

まったく表情を変えない私に、ラスタがツッコむ。

「レ、レックウザですよ！？ホウエン地方で語り伝えられる、幻のポケモンですよ！？」

ラスタ、驚いてるわと思いつつ、こくりと頷く。

「知っているわ。読んだ本に壁画が載っていて、こんな風だったわ」

画面を指差す。長い筒状の鮮やかな緑の身体、二本の鋭い爪のついた手、これまた鋭い牙が生えた口。

「パパ、ホウエン地方にいるのかしら？」

「そこじゃないですよお嬢様」

平静を取り戻したラスタに突っ込まれる。

「…それにしても、まさかレックウザとは…さすがです旦那様！このラスタ、一生ついていきます！」

…まだ混乱しているようだ。

「…ラスタ、ついてきてくれる？お庭で、レックウザをボールから出したいのだけれど…」

こんな状態の彼では正直頼りないが、屋敷で一番ポケモンの扱いに長けているのも彼なので、同行を頼む。

「…へっ！？レックウザを、ボールから出す！？」



∴それから、小一時間お説教が始まった。

## 誕生日（後書き）

読んで下さった方、ありがとうございます！

え、なぜにレックウザ？と尋ねられれば、好きだからとしかお答えできません。可愛いですよレックウザ！

シリアス、ほのぼの、ギャグ、冒険、友情、恋愛…これらの要素を含めて、頑張りたいです。

他の作品も投稿していますので、よろしかったら…その、そちらも…どうぞ。

## レックウザはお怒りのようです(前書き)

お気に入り登録してくださった方がいらっしやっただようで、驚きました。ありがとうございます！…でも、その…よろしかったら、今後の精進のために感想を頂きたいな、と…。お願いします！上達したいのです私！

今回で、ようやくレックウザが登場します。…氷技で一撃、なんて言わないでくださいよ！？弱点がないポケモンなんて、悪&ゴーストタイプだけです！

## レックウザはお怒りのようです

「よろしいですかお嬢様？伝説のポケモンとは、他のポケモンとは一線を画した存在なのです。その能力たるや凄まじく、天災を引き起こしたりもします。ポケモンをお持ちになつていないお嬢様が、このレックウザを従えるのは、不可能でしょう。なぜなら……」

口をはさむ隙がない。かれこれ一時間は話し続けている。

「……ですから、レックウザをボールから出すのは、旦那様がお帰りになったときでなくては。暴走した場合、このお屋敷は壊滅し、辺り一面は火の海になるでしょう。旦那様は、私など比較にならないほど優れたトレーナーでもあられます。その日まで待つて……」

「……やだ」

呟くと、ラスタの説教じみた説得は中断された。

「……お嬢様？」

「パパがいつ帰って来るかもわからないのに、ずっとこのレックウザを閉じ込めておくの？私はこのレックウザを逃がしたい。このレックウザも、そう思ってるはずよ」

紫色のボール。人からすれば夢のようなこのボールは、ポケモンからすれば悪夢のようなボールだろう。

投げられたら、そこでお終い。パパがこのレックウザとバトルしたのかは知らないけれど、どれだけ悔しかっただろうか。

抗つても、強制的に押さえつけられ、捕獲される。そんなのは。

「……ラスタ、教えてくれたわよね。ポケモンと人は、主従の関係ではなく、対等なのだ。お互いを認め合い、歩み寄り、協力するのが真の姿だと。……嘘じゃないわよね？」

ポケモンの優れた力を、道具とみなし利用する人もいる。それは、知っている。

「……私は、このレックウザと対等になれるような人間じゃないの。トレーナーとしてどころか、人としても欠けている私には。だから

「…」  
勝手なことを言っているのは、わかっている。パパは私の為にこのレックウザを捕獲し、私は私の考えでこのレックウザを逃がそうとしている。

私達親子の都合に振り回されるレックウザからしてみれば、たったものではないだろう。

「…お嬢様」

顔を上げると、ラストが辛そうな顔をしていた。何で？

「わかりました。このラスト、お嬢様のお心のままに」

一礼すると、ラストは私の手を取った。

「…ご安心ください。お嬢様は、私がお守りします」

庭へと向かう彼に手を引かれている私は、その背中ににじむ覚悟に、罪悪感と感謝の念を抱いた…。

屋敷の使用人を全員避難させ、敷地内にいるのは私とラストと、彼のポケモン達だけ。

「…さあ、お嬢様。ボールを投げてください」

緊張に顔を強張らせた彼。その隣で闘志まんまんな、彼のライチユウ。

「…ごめんなさい。ラスト」

こんなの、執事の仕事じゃない。命を懸けてまで、彼が私に付き合うことはない。

私一人なら、どうなったってかまわない。でも、彼は違うはずだ。彼を必要としている人は、確かにいる。

謝ってすむことではないけれど、謝罪の言葉が勝手に出ていた。

驚きに目を見開く彼を横目に、ボールを投げる。…全然とばない。数メートルの距離に落下したボールから、かっと光が発せられる。

「ぐおおおおおおおおおおおん！！」

轟いたのは、咆哮。あまりにも大きなその声に、耳を塞ぐ。

「ぐるるるるる…」

唸り声。巨大な伝説のポケモンが、目の前にいた。細長い筒状の身体は鮮やかな緑色で、黄色の輪のような模様がある。私を見つめる瞳は爪や牙と同じく鋭く、恐ろしい。

恐ろしい。けれど、何と雄大な姿だろうか。

私は、見惚れていた。その巨大で、美しい姿に。その、命の輝きに。

「貴様が、あの男の娘か？」

突如として頭の中で響き渡った、若い男性の声。まさか、誰かいるの？

辺りを見回しても、目に入るのは綺麗に整備された庭と、レックウザと、ラスタとライチユウだけ。誰も、いない。

「お、お嬢様？どうされたのですか？」

レックウザを警戒しながらも、私を気遣うラスタ。彼には、今の声が聞こえなかったのだろうか？

「今、男の人の声が……」

「それは吾輩だ」

また、聞こえた。やっぱり、誰かいる。

「吾輩？……レックウザ、あなた話せるの？」

「ふん。話してはおらん。……まあ、テレパシーのようなものだ。その男には聞こえておらんぞ」

ぶんと尻尾を振ると、風圧が生まれて髪が乱れる。すごい風圧だ。

「吾輩の質問には、しっかりと答える。貴様が、あの男の娘かと訊いた」

「あの男？」

聞き返すと、苛立ったように尻尾を地面に叩きつける。どれほどの力で叩いているのか、地面が揺れる。

「吾輩を、貴様が手にしたそれで捕らえた男だ」

それ、とはマスターボールのことだろう。忌々しげに紫色のボールを睨むレックウザ。

「…ええ。あなたを捕獲したのは、私のパパだと思うわ」  
その瞬間。とてつもない殺気を感じた。

「お嬢様！」

ラストに腕を引かれ、私の立っていた場所にレックウザの尻尾が叩きつけられる。先程の比ではなく、地面が抉れた。

助けてもらわなくては、死んでいた。

「…ありがとう、ラスト」

「お礼など結構です！」

背後に私をかばい、ラストがレックウザを睨みつける。ライチュウが、頬袋からビリビリと微かに放電している。

「…これしき、自らで避けることもできないか。貴様如きが、この吾輩を従えようなど笑止千万！」

向けられた視線には、侮蔑がこもっていた。テレパシーが通じていないラストにも、それがわかつたらしい。

「…お嬢様、レックウザは何と言ったのです？」

「この程度、自分で避けられないのか。貴様などが私を従えようなど、笑わせるな！…と言っているわ」

レックウザの言う通りなので、淡々と伝える。従えるつもりはないけれど。

「吾輩を従えるどころか、貴様のような虚ろな娘に仕えねばならんその男も不憫よ。あの男に仕えればよいものを…人間の、事情というやつか？」

小馬鹿にしたように、レックウザが笑う。黒く縁どられた口が吊り上がったので、おそらく笑ったのだろう。

「…お嬢様」

通訳を、と目で乞われ、そのまま伝える。

「私を従えるどころか、貴様のような空っぽな娘に仕えなくてはならないその男も不憫だな。娘の父親に仕えればよいのに…人間の事情というやつか?…と言っているわ」

「…何ですって?」

ラストの雰囲気、変わった。…怒った、のだろうか？

「…伝説のポケモンだからって、好き勝手言ってくれますね。こんな人を見る目もない子蛇に、マスターボールを使う価値なんてありませんよ」

「何だと!？」

レックウザが、怒りの声を上げる。今しがたまで侮蔑を浮かべていた目は、憤怒に染まっていた。

「人を見る目がない、と言ったのです。お嬢様は、一見すると無気力で何もする気のないダメ人間のようですが、とても優しいお方です。そのことに気付きもしないあなたに、よく伝説なんて大層な呼び名が付いたものですね」

「ふん！優しいだど!？己の力もわきまえぬ人間が、偽善に酔っているだけであるうが!」

吐き捨てるように、レックウザは言った。

「実に下らぬ!」

張り詰めたような緊迫感。のどかな庭にはまったく似合わない。

…私は、戸惑っていた。ラストの言葉に。

優しい？私が？

「お嬢様。この子蛇の通訳を、お願いします」

戸惑う私そつちのけで、睨み合う両者。

「…えつと…優しさなど、己の力もわきまえない人間が、偽善に酔っているだけだ。下らない…ですって」

私の訳を聞いたラストは、腕を組んで笑った。

巨大な身体を見上げるその目にあるのは、勝ち誇ったような色。

「…やはり、人を見る目がありませんね。お嬢様は、自らの行為に酔いしれるような愚かな方ではありません。この方の真なる優しさを、そんな低俗なものと捉えるあなたのほうが、己をわきまえるべきですよ」

「…調子にのりすぎだ、人間!」

レックウザの怒りが、爆発した。通訳なしだが、ラストにはその



咆哮の意味がわかったらしい。

開戦の、咆哮。

「…上等です！私の主を侮辱したことを、後悔しなさい！」  
こうして、戦いは始まった…。

## レックウザはお怒りのようです（後書き）

：カノンお嬢様そっちのので、レックウザとラストが喧嘩してま  
すね。正直言つて、彼の存在は一話限りでした。しかも、名前なし  
のただの執事です。ですが、話を進める上で彼の存在が必要になっ  
てくることに気が付き、こうして立派な主要人物となりました。考  
えた人物は全員好きですが、彼もなかなかお気に入りです。

今のところ、人物の容姿の描写はなしですが、これからの話でし  
ていきます。現在わかるのは、カノンお嬢様がまな板ということぐ  
らいでしょうか（笑）。

ポケモン大好きなのにバトルは苦手。こんなまどろみの作品です  
が、楽しんでいただけたら嬉しいですよ！

見たくないの（前書き）

ごめんなさい、ラスト。2話でのキミの名前、間違えてました。

…ラスク？誰それ、です。後書きで「お気に入りです」とかどの口が言うのでしょうか。…反省します。

え、何故か私が投稿しようとするエラーになります。ので、書きあげているのに更新できないという事態が起こるかもしれません。…投稿したいのですよ！？まどろみは！

…お気に入り登録してくださいった方、お読みになってくださった方、ありがとうございます。私は小説が大好きですので、これからも頑張っていきたいです！

## 見たくないの

「くらえ！」

レックウザの口から放たれた、『りゅうのいぶき』。

「ライチュウ！『まもる』！」

「ライツ！」

ラストの指示に、即座に従うライチュウ。瞬時に球状の壁を展開し、身を守る。

「小癩な！…叩きのめしてくれ！」

防がれたレックウザは、尻尾をゆらりと振った。振られた尾が、鋼の輝きを帯びる。

「ライチュウ、『10まんボルト』！」

「ラツ…」

応え、身体から電気エネルギーを放とうとするよりも早く、  
「遅い！」

レックウザの尾が、ライチュウを吹き飛ばした。おそらく、『たたきつける』ではなく、『アイアンテール』。

「ライチュウ！？…すまない、戻れ！」

植え込みで戦闘不能状態となったライチュウを、ボールに戻すラスト。得意げなレックウザを、悔しげに見据える。

「…むっ！？身体が…！？」

そのとき、レックウザの動きが鈍くなった。  
にやりと、ラストが笑う。

「…『せいでんき』。ライチュウの特性です。物理攻撃してきた相手を、麻痺させる…運がないですね」

好機とばかりに、モンスターボールを投げる。現れたのは、ジュゴン。

「許さぬぞ！人間！」

麻痺したというのに、レックウザの闘志は衰えない。それどころ

か、ますます怒り、高まっている。

「通訳は結構ですよ、お嬢様!…ジユゴン、『ねこだまし』!」  
ジユゴンが、小さな手を叩く。びくりと、レックウザの巨体が怯む。

「今です!『れいとうビーム』!」  
氷タイプの技は、ドラゴン&飛行タイプのレックウザには効果抜群。大ダメージを受ける。

ただしそれは、『当たれば』の話だ。

「…馬鹿な!麻痺してなお、これほどの速さで動けるとは…!」

『ねこだまし』の追加効果で怯んだレックウザだったが、発射された『れいとうビーム』を飛んで回避してみせた。

「…はっ!伊達に伝説と呼ばれておらんわ!」

驚くラストを嘲い、麻痺したとは思えない速度でジユゴンを翻弄するレックウザ。

「ジユゴン!『ごこえるかせ』!」

「甘いわ!」

広範囲の氷技に、すかさず上空に飛び上がって躲したレックウザは、

「恨むならば、吾輩に刃向った愚かな主を恨め!」

急降下して、ジユゴンを鋭い爪で切り裂いた。

『ドラゴンクロー』。完璧に、決まった。

しかしジユゴンは、倒れなかった。

「なっ…!?!」

レックウザは驚き、動きを止めた。

今にも力尽き、倒れそうな、ジユゴンの間近で。

「最大パワーで『ふぶき』!」

「ジユゴオン!」

瀕死の状態で繰り出される、ジユゴンの『ふぶき』。

「ぐおおおおおおお!?!?!?!」

吹き荒れる『ふぶき』。その威力は凄まじく、庭の木々が全て凍

りつき、私は余波で吹き飛ばされそうになった。

視界が白で覆われ、何も見えなくなる。が、レックウザの苦悶の咆哮ははつきりと聞こえた。

「…やめて」

私の声など、その苦痛の叫びにかき消される。

「ジュゴン!? しつかりしなさい!」

視界が晴れ、私の目に映ったのは、傷つき倒れたジュゴンと駆け寄るラスタの姿。

「…はっ、…はっ…」

そして、荒く息をつくレックウザ。かなりのダメージを負っているようだ。

それなのに、瞳に宿る闘志は微塵も薄らいでいない。

「…ありがとうございます、ジュゴン。よくやってくれました」

ボールにジュゴンを戻し、レックウザと向き合うラスタ。その手には、すでに三体目のモンスターボールが握られている。

彼の目にも、戦うという決意があった。このレックウザに何としても打ち勝つという、強い決意が。

…私は、何をしているのだろうか。一番の当事者であるはずの私が、傷つくこともなく傍観しているなんて。

「…なかなか根性のあるジュゴンではないか。驚かされたぞ」

にいと笑う、レックウザ。身体は、ぼろぼろだ。

「そちらこそ、私のジュゴンの『ふぶき』を受けてまだ立っているとは…さすがですね」

賛辞に賛辞で返すラスタ。三体目のボールを握る手が、震えている。…それは怒りか、恐怖か、悲しみか、武者震いか…。

わからない。レックウザの言う通り、空虚な私には。…だけど。

「…いや」

もういやだ。これ以上、傷つくところを見るのは。

このまま戦い続ければ、失ってしまいそうな気がする。…大事な、何かを。

「やめて！ラスタもレックウザも、もうやめて！」

「やかましい！引っ込んでおれ、小娘！」

張り上げた声も、レックウザの唸りに近い怒鳴り声で一蹴されてしまう。

「お嬢様、危険ですからそこにいてください」

レックウザが止まらない限り、ラスタも止まる気はない。静かに言うと、ボールを振りかぶった。

いけない。また始まってしまう。

私は、駆けだしていた。衝動的に。

頭にあるのは、止めなくてはという思いだけ。

「…血迷ったか小娘」

ラスタは、はるか後方にいる私が駆け寄って来ていることに気付いていない。

そして、レックウザの言葉は私にしかわからない。

レックウザの尾が、揺れる。

来る！

そう感じ、振り下ろされた尾を間一髪回避する。…レックウザが麻痺していなければ、躲すことなど到底不可能だっただろう。

「ほう…」

レックウザの目がわずかに見開かれ、

「お嬢様!?!」

振り返ったラスタが、悲鳴に近い声で私を呼んだ。

「ラスタ！命じます、動かないで！」

モンスターボールを投げようとした彼を止め、そのまま走る。

手にあるのは、マスターボール。

「小娘、貴様何を…」

「…そこまでよ、レックウザ！」

レックウザの言葉を遮り、マスターボールを向ける。

「戻りなさい、レックウザ！」

私の声と同時に、ボールから放たれた赤い光線がレックウザに当

たった。

「…貴様」

ボールに戻される寸前、レックウザは私の目を見て…笑った。

怒りでも驚きでもない…その目にあるのは、もっと別の…。

緑色の巨体が消えた庭に転がっていたのは、一個の紫色のボール  
だった…。



見たくないの（後書き）

…まだ旅立ちもしないなんて…進行の遅さに愕然とするまどろみです。オリジナルキャラばかりで、公式のヒビキくんやコトネちゃんが出てきません。これはまずい！

「…私では、役不足？…そうよね」

…ってああ！？カノンお嬢様が心なしかがっかりしておられる！？「まどろみさん…私の名前を間違えただけでなく、お嬢様をがっかりさせるとは…覚悟はできていますか？」

ひいひいひいひい！！ごっ、ごめんなさいひいひいひい！！

「作者・まどろみ猫逃亡のため、後書きを終了します。読んでくれた人、ありがとう！」

「近いうちに、私達にも出番があるってことね！」

「…ふん。別に、どうでもいいけどな」

## 気に入った！（前書き）

はい、前回の後書きでラストさんに追っかけられたまどろみ猫です。：バトルの描写は難しいです。このお話は、お嬢様の人として、トレーナーとしての成長を描きたいので、バトルはあまりしません。それでもいいよという方は、どうぞお読みください。

気に入った！

屈んで、マスターボールを拾う。

「…お嬢様！ご無事ですか！？」

ゆっくりと、駆け寄ってきたラストの方を向く。

「…ラスト」

急に、足から力が抜けた。どうしてだろうと客観的に考えていると、ラストが抱きとめてくれた。

「ラスト、大丈夫？怪我とかしていない？」

ポケモンバトルでは、技に巻き込まれてトレーナーが大怪我をすることだってある。心配になって訊くと、

「…！こちらの台詞ですよ、カノンお嬢様…！」

ぎゅっと、抱きしめられた。…よかった、怪我はしていないようだ。

「お嬢様の身が危ういのに、動くななどと…！もう二度と、あんな命令はしないでください…！」

抱きしめてくるラストの腕は、強くて。

絞り出すような声は、泣き出しそう。

「…うん。ごめんなさい…！」

私は、謝っていた。

ラストを、苦しめてしまったと気付いたから。

自己嫌悪、というものがある。今の私は、正にその自己嫌悪中だ。

『戻りなさい、レックウザ！』

…何だ、あの言い方は。あれではまるで、私がレックウザのトレーナーのようだ。

…私に、トレーナーの資格などないのに。

「お嬢様、御気分はいかがですか？」

いつの間にか、ラストが部屋にいた。心配そうに、ベッドで寝て

いる私を窺う。

「…良くは、ないわ。私、レックウザに命令してしまったから」

身体を起こして、膝を抱える。平らな胸だと、この姿勢はとりやすいのだ。

「…レックウザ、怒っているでしょうね」

ナイトテーブルに置かれた、マスターボール。ランプの明かりを受け、妖しい紫色に輝いている。

「あんな偉そうなこと言っておいて…ライチュウもジユゴンも、レックウザだって傷ついた。みんな、私のせいだわ…」

膝に、顔を伏せる。申し訳なくて、ラストの顔が見れなかった。

「…お嬢様。やっぱりあなたは、お優しい方です」

どんな顔をして、そんなことを言うのか。

「やめて。…私は、優しくなんてないわ」

顔を伏せたまま、言う。胸が、苦しい。

「…やさしく、なんか…！」

ぐっと、溢れてきそうになるものを押さえつける。無理矢理に。

泣かない。泣けない。私に、涙なんてないはずだもの。

「…出て行ってラスト。一人に、してちょうだい」

そう言わなくては、彼はここに居続けるだろうから。…居たくもない、はずなのに。

「わかりました。カノンお嬢様、お休みなさい」

「…おやすみ、ラスト」

ドアが、静かに閉められた。

案の定、私の両目から涙が零れることは、なかった…。

カノンお嬢様は、独りを望まれている…。

出て行くと、命じられたならば。その通りに、しなくてはならない。

たとえ私が、お傍にいたいと願っても。お嬢様が、それを望まれないなら。

静かにドアを閉め、私はため息を吐く。無性に、悲しかった。  
「…旦那様」

何処か遠い地におられる、敬愛する主人に思いを馳せる。  
あの方なら、お嬢様のお心を癒すこともできたのに、と…。

仕方のないことだと、わかつている。あの方は、ご多忙なのだ。

『カノンを、頼んだぞ。無気力で無表情で無感情だと思っつかもしれないが、そんなことはないからな』

五年前。屋敷を出て行かれたきり、旦那様は戻られない。

…最初は、旦那様の為だった。ご命令だから、お嬢様のお傍にいた。嫌では決してなかったけれど、本音を言えば旦那様に付いて行きたかった。

それが、いつしか変わった。お嬢様の、お傍にいたいと切望するようになっていた。

「…お嬢様」

ドアの向こう側で、あなたは泣いているのですか？そうだとしても、私は…。

ここから、動くことができないのです。あなたの、ご命令がない限り。

「娘よ！吾輩は貴様を気に入ったぞ！」

目を細め、穏やかに私を見るレックウザ。昨日の敵意はどこへいったのか。

「…ありがとう」

屋敷は、ジョウト地方の孤島にある。孤島といってもそれなりの大きさで、山もあるし湖もある。

パパの、所有地だ。住んでいるのは、元からこの島に生息していた野生ポケモンと、屋敷の使用人さん達だけ。

「…薄い反応だ。もつと喜べ！」

私の反応が不満だったらしく、レックウザは低く唸った。

「それでも、喜んでいるのよ？」

屋敷の裏山。少しひらけた場所で、私とレックウザは向き合っている。時折木々が揺れるのは、珍しい訪問者を見物しに来た野生ポケモンがいるのだろう。

「…そうか？ならばよい！」

尊大な態度で言っていると、レックウザは私の目の前に下りてきた。

見上げていると首が疲れるので、正直ありがたかった。

「…娘、昨日の発言を撤回しよう。…すまなかったな」

…何故、私が謝られているのか。謝ろうと、思ったのに。

「レックウザが、私を空っぽって言ったこと？…その通りだから、謝ることなんてないわ」

そう言つと、レックウザはぐるぐる…と唸った。どこか、悔しげに。

「わからないのか、娘？吾輩が間違っていた。貴様は、虚ろなどではない。…虚ろな者に、あのような目はできぬ」

どうして、わからぬのか…。どうやら、私がレックウザの言う事を理解できないのが悔しいらしい。

「吾輩の一撃を避け、単身吾輩に向かってきた貴様の目は、生き生きと輝いておつたぞ？…吾輩は、貴様の目に魅せられたのだ！」

じいっと、至近距離で見つめられる。…そんなことを、言われても。

「…吾輩の身体に近い、あの空のように澄んだ翠の瞳…あのとときの貴様の目は、美しかったぞ？あの子を見たのが吾輩だけというのは、何とも嬉しいことだな！」

言葉通り、レックウザは嬉しそうだった。地表から数メートル浮かび上がって、長い巨体をくねらせ飛行する。

木々に囲まれた、空。天空の化身と呼ばれるレックウザには、狭すぎるだろう。

「…こちらこそ、ごめんなさい。私達親子の都合に付き合わせて…痛かったわよね」

身体も、心も。傷付いただろうに。

「そのようなこと、伝説と呼ばれし吾輩達には日常だ。…娘が気にすることではないよ」

飛行を止め、優しい目で、レックウザは言う。

「…遙かな昔から、吾輩の強大な力を欲する人間と、戦い続けてきた…。だが、あの男は違った。あの男が望んだのは、『吾輩と、娘がトモダチになる』こと…」

あの男とは、パパのこと。

「初めて貴様を見た時は、冗談ではないと思ったが…今では、悪くないと思っておる」

首を振る。それでは、ダメだ。

「私には、あなたという資格はない…私には…」  
俯いた私に、

「な、泣くなよ!？」

慌てたレックウザが、声をかける。

「資格など、必要なかろう!? 吾輩が勝手に貴様の傍にいたと言ったのだ!…だから、その…難しく考えるな!これだから人間は…!」  
わたわたと忙しなく飛び回るレックウザの影が、地面に映る。

「…泣いて、ないわよ…。レックウザ、ありがとう」

顔を、上げる。こんな私を、慰めようとしてくれるレックウザの気持ち、嬉しかった。

「…何だ。娘、そんな風に笑えるのではないか」  
…と、レックウザが笑った…。

## 気に入った！（後書き）

ポケモンは道具ではない！…そうであるかはトレーナー次第だと思います。対等？そんなのありえないというのも、また一つの考えです。

ポケモンとはこういう存在であるというのは、トレーナー自身を考え、決めることだと思います。悪だの善だの、そんなものは幻想にすぎません。絶対なる悪も、絶対なる善も、存在しないのです。それが、私の考えです。

読んで下さった方、ありがとうございました！



## 狙いくる者（前書き）

初めて買ってもらったポケモンは、金・銀でした…。赤・青・緑は姉の世代です。私は金、妹は銀を買ってもらい、仲よく遊びました。…懐かしいです。

しかしです。それ以降の作品もプレイし、さまざまなかポケモンを育ててきたまどろみ猫も、どんな技を覚えるかはうる覚えです。そのため、一番末の妹が持っている攻略本に頼ろうとしていたのですが…売り払われていました。

だから、今日買ってきました！ポケモンの図鑑、見ているだけで楽しいです！

## 狙いくる者

「娘よ、名は、何と言うのだ？」

吾輩は、この変わった娘に名を尋ねた。まさか、吾輩が人間に興味を持つ日が来ようとは…。

「カノンよ。レックウザに、名前はあなの？」

吾輩の名…そんなものはない。一匹で生きる吾輩には、必要なかったのだ。

「ない。…カノンよ、貴様が吾輩の名を付けよ」

この娘なら、名付けられてもよい気がする…。

「いいの？…うん…」

しばし、真剣な顔で考え込む娘。今更ながらに気が付いたが、この娘、なかなか可愛い顔をしている。

やけに必死になって娘を守ろうとしていたあの男。名は確か…ラスタと言ったか？…ほほう。そういうのも、面白いやもしれぬな。などと考えていると、

「レッシー！レッシーでどうかしら！？」

娘…カノンが、昨日とは違う輝きに満ちた瞳を、吾輩に向けた。

…レッシー？

がぱつと、顎が外れそうになる。…開いた口が塞がらないとは、正にこのこと。

「…すまぬ。レッシーだけは勘弁してくれ…！」

純真な瞳から目を逸らし、吾輩は嘆願する。レッシーだけは、何としても回避しなくては！

「…気に入らなかつた？レックウザ…」

しょぼんと、落ち込むカノン。一生懸命考えてくれたのだろう。罪悪感がすぎすぎと痛んだが、それでも！

「…すまぬな」

レッシーは、レッシーだけは！

「わかった…。ごめんね、レックウザ」

頂垂れるカノン。どうすればよいのか…話題を、変えればよいか！？

「そうか、それだ！…ナイス、吾輩！」

「そ、そうだ！カノン、あのラストという男はどうした？」

「…ラストは、パパからお屋敷の管理も任されているから、忙しいの…」

無表情の中に、どこか寂しさを漂わせ、カノンは言った。

「…ラスト、本当はパパに付いて行きたかったの。昨日、レックウザが言った通り」

…地雷だったようだ。昨日の吾輩を、全力で殴りたくなった。

いかん！ますます沈んでいる！

ええい！引き揚げられるか！？

「…そうか？吾輩には、あの男がカノンのことしか考えておらんように見えたぞ。あそこまで必死になるのだ、もっと己に自信を持って」

「自信…？でも、私には…」

…そこまで、自身を卑下することもあるまい。

「安心しろ。カノンは欠けたりしていない。…ただ少し、心に鈍いだけだ」

実際、そうだと吾輩は思っている。この娘には、ちゃんと『感情』がある。

「…そう、なのかな…」

戸惑うカノンに、力強く頷いてみせる。

「そうだとも！…そうだな、吾輩と旅に出てみないか？世界は広い、色々な人やポケモンと出会えるぞ？」

天を仰ぐ。晴れ渡った空は、どこまでも広い。

「カノンは、空虚ではない。…旅をすることによって、それを知らるだろう」

辛いことも、楽しいことも、悲しいことも、嬉しいことも…もっと、味わうべきなのだ。

「旅…旅すれば、私は…」

カノンも、空を仰いだ。囁きが、吾輩にも聞こえた。

「…変わる、かしら…？」

「変われるとも。そう願い、行動すれば」

ほとんど思いつきだった、なかなかいい案ではないか？カノンも、元気になったようだし。

…流石だな、吾輩！

得意になっていると、そっとあたたかいものが、吾輩の背を撫でた。何だ？

「…ありがとう、レックウザ。私と一緒に、旅に出てくれる？」

あたたかいものは、カノンの小さな手で。遠慮がちな、微笑みを浮かべて。

…まったく、変わった娘だ。

「よかるう。吾輩とカノンは『トモダチ』だからな！」

以前の吾輩ならば、そんなことは欠片も思わなかっただろうに。今では、そうありたいとまで思っているのだから。

「…レックウザ、発見！捕獲作戦開始！」

穏やかな空気を乱したのは、人間。

「…飛ぶぞ、カノン！」

「きゃ！？」

本能で危険を感じ、カノンを掴んで上空へと逃れる。手の中のカノンを潰さないよう気を付けながら、地表に目をやる。

先程まで、吾輩達が立っていた場所に『れいとうビーム』が放たれていた。

直感に従っていなければ、直撃だっただろう。

「レックウザ？急に、どうしたの？」

手の中のカノンが、事態をわからず尋ねてくる。

「…敵だ。吾輩を、捕らえようとしている」

答えた声が固くなったのは、カノンの存在を再認識したからだ。

…このままでは、応戦できない。

「連続で『れいとうビーム』と『10万ボルト』だ！絶対当てる！」  
考える時間も与えられずに、地表から技が放たれる。躲しながら、吾輩は更に上空を指指そうとして…やめた。

吾輩は、大気圏でも生きられる。しかし、カノンは何？人間の身が、上昇して耐えられるのか？

…わからないなら、すべきではない。そう判断し、回避を続ける。

「…飛行部隊！その娘を狙え！トレーナーだ！」  
敵の怒鳴り声。…飛行部隊だと！？

首を巡らすと、こちらに向かってくる無数の黒い影。

「…ゴルバットだわ」

流石の我輩も、カノンに目を向ける余裕はない。地上からの技と大量のゴルバットの『エアカッター』を回避しつつ、この状況を打破する方法を考える。

どうすればよいのか。今は何とか躲せているが、いずれ当たる。だが、反撃しようにもカノンが手の中にいる。…戦いにくいし、危険だ。

逃げ出そうにも、すでにゴルバットの群れに囲まれている。強行突破も考えたが、それもカノンのことを考えると…。

「…レックウザ、私に考えがあるのだけれど…」

八方塞の我輩に、遠慮がちに声をかけるカノン。

「考え！？どのような考えだ！？」

ますます激しくなる攻撃。手を講じなくてはと焦る吾輩に、カノンが提案する。

「…駄目だ！危険すぎる！」

しかしそれは、『吾輩』ではなく『カノン』が危険にさらされる作戦だった。

「ぐっ！？」

「レックウザ！？」

気が逸れ、不覚にも一撃もらってしまった。不幸中の幸い、『れ

いとうビーム』ではなかったが。

「お！当たったぞ！もつと当てて弱らせる！」

オニドリルに乗り、ゴルバット達を指揮する男が言う。…調子にのりおつて！

「…でも、このままじゃレックウザが…！私のことなら、気にしないで！」

必死に、カノンが言いすぎる。自身より、吾輩の身を優先するとは…。

こんな状況にも関わらず、笑みが浮かぶ。…尾に、痛みが走ったが、大して気にならない。

「…わかった…良いのだな、カノン？」

手の中の娘。その目に恐れの色はなく、吾輩が魅せられた煌めきがあった。

「ええ！…いくわよ！」

頷き、カノンは紫色のボールを、吾輩へと向けた…。

## 狙いくる者（後書き）

お読みくださり、ありがとうございます！今回はレックウザ視点です。彼（伝説のポケモンであるレックウザに性別はありませんが、オスっぽいので彼と呼びます）は、今まで見てきた人間とは違うカノンお嬢様に、自分でもよくわからない感情を抱いています。…なにやら、誤解を招きそうな表現ですが、これからカノンお嬢様とレックウザは絆を深めていくのです。

レッシー…可愛い名前だと思っておりますがねえ…？

構想はあらかたできているのですが、何分時間がなくて…不定期になっってしまうかもしれません。ごめんなさい！

…ペンドラー可愛いですよペンドラー…（ぼそり…）。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4861z/>

---

ポケットモンスター ~お嬢様とレックウザ~

2011年12月21日00時56分発行